

## Живые мощи Иван Сергеевич Тургенев

### 生神様

——イワン・ツルゲーネフ原作 中山省二郎譯

【やぶぢゃん注：これは

Иван Сергеевич Тургенев (Ivan Sergeyevich Turgenev)

Записки охотника (Zapiski okhotnika)

イワン・セルゲーエヴィチ・ツルゲーネフ（一八一八年～一八八三年）の「獵人日記」（一八四七年～一八五一年に雑誌『同時代人』に発表後、一篇を加えて二十二篇が一八五二年に刊行されたが、後の七十年代になって更に三篇が追加され、一八八〇年に決定版として全二十五篇となった）の中の

Живые мощи (Zhivye moshchi)

の全訳である（一八七四年選集『共同出資』初出）。底本は昭和三一（一九五六）年角川書店刊の角川文庫のツルゲーネフ中山省二郎譯「獵人日記」の下巻の、平成二（一九九一）年再版本を用いた。文中の割注や底本の巻末にある訳者注を作品末に示した（但し、文中にある注記号「\*」はうるさいので省略した）。なお、本底本は再版された際、旧活版の欠損部分の一部が写真植字により補填されているのであるが、その補填が非常に杜撰である。漢字が新字体表記となっていたり、歴史的仮名遣を誤っていたりして、凡そ何者が為したのかと義憤を感じる程である。本篇でも例えば底本一七〇頁の最終行の改行された行頭の一文、ルケリヤがピョートルの治療の申し出を断って独居の不思議な心境を語り終えたシーン（歌を歌う直前）で、「ルケリアは苦しそうに溜息を洩らした。」とある。名前の表記

も歴史的仮名遣も誤っている。こうしたものをそのまま残すのも、また、注記するのも、中山氏に恥ずかしいことであるので、断りなく補正していることを言い添えておく（補正後に同テキストと思われる昭和一五（一九四〇）年岩波書店刊の文庫版で確認した）。訳者中山省三郎氏は昭和二二（一九四七）年五月三十日、宿痾の喘息のために四十四歳で逝去されている。そのこと（著作権満了）によって、不遜にも私が本作を公開出来る点に於いて、中山先生への追悼の念を心からここに述べおく。【二〇〇八年六月十八日】

この縦書PDF版を、二〇一一年三月十九日午前五時二十一分、筋萎縮性側索硬化症のために天に召された、**母ルケリヤ聖子テレジアに捧げる——直史ルカ——**【二〇一四年十一月五日

月五日 藪野直史】

## 生神様いきがみさま

永き忍苦のわが郷國よ、——

あゝ、露西亞の民の國！

——フョードル・チュツチェフ

佛蘭西の諺に『乾いた漁師と濡れた獵人は見るも哀れだ』といふのがある。私は未だ曾て漁に特別の興味をもつたことがないので、晴れた好い天氣の日に、漁師の束縛がどんなものか、また天氣の悪い日に、漁がたくさんあつたといふ楽しみが、どの程度まで濡れてゐる不愉快さに打ち克つものか、とんと見當がつかない。然しながら獵人にとつて雨といふやつは、まことに災難である。丁度この災難にエルモライと私とは、ピエーレフ郡へ松鷄まじりを撃ちに行つた時に出つくはした。——夜の明け際から雨はちつとも止まない。雨除けの方法は仕つくしてしまつた！ 護謨びきの合羽を頭からすつぽり被つて、雨の滴をできるだけ避けようと、樹蔭に佇んでゐた……。雨合羽が射撃の邪魔になることは先づよいとしても、甚だ無様にも水を透し、それは樹の下へは、たしかに初めのうちは、雨の滴も落ちて來ないと思はれたが、やがて其のうへにたまつた雨水が急にあふれ出して、それが雨樋から落ちるやうに、枝から降りかかつて來た。冷たい水がネクタイの下へ入りこんで、脊椎せぼねを傳つて流れる……。これはエルモライがいつた通り、『もうよくよくのこと』であつた！ 「いや、ピョートル・ペトローキツチ」と彼はたうとう叫び出した、「こんなぢや駄目だ……、今日は獵は出來ましねえ。犬の鼻は濡れて利かなくなるし、鐵砲へは火がつかず……、えい！ 縁起が悪い！」

「一體、どうしたらいいだらう？」

「まあその何ですね、アレクセーエフカへ参りやんせう。旦那あ、御存じねえかも知んねけど、あそこにや農園がありましたな、旦那のおふくる様が持つてらつしやるんで、

ここから八露<sup>や</sup>里ほどあります。今夜はあすこへ泊まつて、そして明日<sup>あした</sup>……」

「ここへまた引つ歸すのか？」

「いんえ、ここへぢやありませんねえ……アレクセーエフカの向ふに知つてる所があるんです……、松<sup>ま</sup>鶏<sup>どり</sup>にや、ここよりあ、ずるぶん好いでして！」

私はこの忠實なる伴侶<sup>つれ</sup>に、それならば何故まつすぐそこへ連れて行かなかつたのかと突き込んで訊ねはしなかつた。そしてその日、二人は母の農園に辿り着いた。正直にいふと、そんな農園のあつたことは今まで夢にも知らなかつたのである。行つて見ると、この農園には小さな離れが附いてゐて、かなり古くはあつたが、今まで人が住んでゐなかつたので綺麗であつた。ここに私は極めて靜かな一夜を過ごした。

翌る日は大變早く眼をさました。陽は今しがた出たばかりで、空には一きれの雲もなく、あたりは一きは強い光りに輝いてゐた、昨日の夕立の名残に、新鮮な朝の光りが照り添うて。——小馬車<sup>トラクイカ</sup>の支度をして貰つてゐる間、嘗ては果樹園であつたが今は荒れ果ててゐる小さな庭園へ私はぶらぶらと出かけて行つた。離れはその庭園の香りの高い、みづみづしい繁みに四方八方から取り圍まれてゐる。あゝ、外氣の中にあると、どんなに爽やかであつたらう。晴れた空には雲雀が囀つて、鈴のやうな囀り聲は銀の色の硝子珠のやうに降つて来る！ 翼の上には、きつと露の滴を載せて持つて行つたに違ひない。その歌聲は露に濡らされたやうに思はれる。私は帽子さへも脱いで、快よく、胸<sup>い</sup>いっぱいに呼吸<sup>いき</sup>なした……。深くない谿の斜面の籬のすぐ傍に蜜蜂の巣が見える。芝草や蕁草<sup>いぢいぐさ</sup>の壁のやうに密生して續いてゐる間を、蛇のやうにうねつて狭い徑がそこに通ひ、その草の上には、どこから種子が來たものか、暗緑色の大麻の尖つた莖が突き出てゐる。

この徑に沿うてゆくほどに、私は蜜蜂の巣のところへ來た。巣とならんで、細い枝を編んでつくつた納屋、いはゆる『圍ひ』が立つてゐる。冬は蜂の巣をこの中へ入れて置くのである。半ば開いてゐる戸口を覗きこむと、中は眞暗で、しんとして、乾き切つてゐて、薄荷<sup>メリッサ</sup>と蜂蜜草の匂ひがする。隅の方には腰掛が取りつけられてあつて、その上に毛布にくるまつて、何か小さなものがある。私はそこを立ち去らうとした……

「旦那様、あの、旦那様！ ピョートル・ペトローキツチ様」といふ微かな、弱々しい、ゆつたりとして、沼地の莎すげのそよぎのやうに唳れた聲が聞こえて來た。

私は立ちどまつた。

「ピョートル・ペトローキツチ様！ どうぞ、お入り下さいまし！」と、その聲がまたいふ。聲はさきに私の眼にとまつた腰掛のあたりから聞こえて來たのだ。

私は近づいて見て、——あまりのことに暫しは言葉も出なかつた。私の前には生きた人間が横になつてゐたのだ。しかし、それは何ものであつたか？

頭はすっかり痩せ衰へて、ただ一様に青銅色をしてゐた。まるでそのむかしに描かれた聖像イコーナのやうであつた。細い鼻はナイフの刃のやうに尖り、唇は殆んど見わけがつかず、ただ齒と眼まなこだけが白く見える。頭巾の下からは黄色い髪の毛が、あらあらと纏れて、額のうへに食はみ出てる。毛布が褶をなしてかかつてゐる顎のところには、小枝のやうな指をゆつくりと繰りながら、同じやうに青銅色をした小さな手が動いてゐる。私はなほじつと彼女に見入るのであつた。顔はただ醜くないばかりではなく、美しくさへもあつた、——が、何とはなしに怖ろしく、この世ならぬもののやうに思はれた。その顔が私に怖ろしく思はれたのは、その顔に、金屬のやうな齧かじのうへに、——つとめても……つとめても弛まない微笑が見えてゐたからであつた。

「おわかりになりませんか、旦那様？」またしても幽かな聲がささやいた。その聲は殆んど動かか動かないかに思はれる唇から洩れいづるもののやうであつた。「無理もございません！ わたし、ルケリヤでございます、……あの、覚えていらつしやいますか。スパツスコエのお母様のところで輪踊ハラウオドりの音頭取をいたして居りましたの……覚えていらつしやいますか、わたしはまた合唱の音頭取でもございましたの？」

「ルケリヤ！」と私は叫んだ、「あれがお前だつたのか？ ほんたうに？」

「わたし、さうでございましたの、旦那様。わたし、わたし、ルケリヤでございます」

私は何といつていいかわからなかつた。私は明かす、死んだやうな眼をして、じつと私を見つめるこの暗い微動だにもせぬ顔に、まるで氣が遠くなつたかの様に見入るのであ

つた。あり得べきことであらうか？ この木乃伊ミイラが——あの背の高い、よく肥えた、色の白い、蝨の紅い——しょつちゆう笑つたり、踊つたり、歌つたりしてゐた——召使のなかで一番の美人であつたルケリヤだとは！ ルケリヤ、あの利口なルケリヤ、村中の若い者が、みなその後を追ひ廻したルケリヤ、私自身——十六の少年であつた私自身が、ひそかに溜息を洩らしたあのルケリヤだとは！

「何をいふんだ、ルケリヤ」と私はやうやくのことのでいつた、「一體、おまへはどうしたといふんだ？」

「それはそれは辛い目にあひましたの！ けど、旦那様、お厭でも、わたしの身の上話を聞いてやつて下さいまし、その小さな桶へお掛け下さいませ、——もつと近くへ、さもないと、お聞きとりになれませんから……わたし、この頃はあまり聲が出ませんの！……でもまあ、お目にかかれて嬉しうございますわ！ どうしてこのアレクセーエフカなんぞへいらしたんでございますか？」

ルケリヤは極めて靜かに、弱々しい聲ではあるが、息もつかずに話をした。

「獵師のエルモライがこつちへ連れて來たんだ。でも、それよりか話が聞きたい……」

「わたしの難儀したことをお話すらんでございますか？——それはお話いたしませうとも、旦那様。もうだいぶ前になりますけど、六年か七年前のことでございます。その頃、やつと私は、ワシーリイ・ポリヤーコフと結婚の約束をしたばかりでございました。あの、覚えていらつしやいますか、容姿なりのよい、捲毛かたの男でして、未だ旦那様のお母様の處で食事方をして居りました？ けどあの頃、貴方はもう田舎にはいらつしやいませんでしたね、モスクワへ學問をしにいらして。私とワシーリイは本當に愛し合つて居りました。私は一時もあの人のことを忘れませんでした。それで事の起りましたのは、春のことでございました。して、ある晩のこと……もう夜明けに間もないのに……どうしても眠れないのです。庭には夜鶯が、ほんたうに惚々するやうな聲で鳴いて居りましてね！……堪らなくなつて私は起きあがつて、踏段の所まで聞きに出てしまひました。夜鶯は、ただもう鳴き續けるのでございます……、すると、ふつと誰かがワーシヤの聲で私を呼んだやうな氣がいたし

また、優しい聲で『ルーシャ！』と呼ぶのでございます……。私はふり返つて見ました、けど、きつと眼が覺めてゐなかつたせゐでございませう、私は急に一番上の段から足をふみはづして、眞直ぐに下へ落ちてしまひました、——そしてひどく地面にからだを打つたのでございます！ ですけど、大した怪我はないと思つて居りました、すぐに起きあがつて自分の部屋へ歸れたくらゐでしたものね……。ただ何か内の方で……。お腹なかの中で、ちぎれたものがあるやうに思ひました、……。息をつかせて下さいまし……。ほんの一寸……。旦那様」

ルケリヤは口を噤んだ。私は驚いて彼女を見た。私が殊に驚かされたのは、殆んど樂しさうに、「あゝ」と溜息ひとつ洩らさずに、一向に不平もこぼさず、同情を求めるといふ風もなしに話をしたことであつた。

「そのことがあつてからといふもの」ルケリヤは話をつづけた、「すつかり痺せ衰へはじめましてね。身體は黒くなつて來ますし、歩くのが大儀になつて來るし、それから、全く兩足が利かないやうになりましたの。立つことも坐ることもできませんので、始終、横になつてゐなければならなくなりました。食べたくもないし、飲みたくもない、だんだん悪くなるばかりでした。奥様は御親切に、お醫者にも見せて下さいまして、病院へもやつて下さいました。ですけど、やはり良くはなれませんでした。それにお醫者様は一人として、私の病氣がどんな病氣か言ひきることさへできなかつたのでした。それはもうできるだけのことは仕盡して下さいました。焼や鏝いで背中を焼いたり、氷で冷やしたり——それでも何の效き目もございませぬ。私はたうとう身體からだが骨のやうに固くなつてしまひました……。さういへば、お醫者様方ももう療治の仕様がなないと、匙を投げておしまひになりますし、お邸に片輪者をお置きになつても仕方がございませぬので、……。まあ、それでここへ送られて參りましたの——ここには身寄の者も居りますので。まあ、さういふ譯で御覽の通りの暮らしをして居りますのです」

ルケリヤはまた黙りこんだ。そして、また無理に笑つて見せようとした。

「しかし、これはあんまりひどいな、お前ん所は！」と私は叫んだ、……。さうして、そのさき何と附け加へたらよいのか分からなかつたので、「それぢや、ワシーリイ・ポリヤー

コフはどうかの？」と訊いて見た。これは甚だ愚劣な質問であつた。

ちよつとルケリヤは眼をそらした。

「ポリヤーコフがどうですつて？——あの人は悲しんでくれました、少しは悲しんでくれました、——けど、ほかの人と、グリーンノエから来た娘と結婚してしまひましたの。グリーンノエを御存じでございませう？　ここからは、そんなに遠くはございませぬ。娘はアグラフエーナと申しました。あの人は、それは私を可愛がつてくれました、——けれど、若いみそら身空のことですし、——いつまで獨りで居るわけにも參りませんものね。といつて、私がどんな配偶つれあひになれませう？　でも、あの人はきれいな、氣だての好い嫁御を探しあてて、今では子供もございませぬ、あの人は、こちらのお隣りで執事をて居りますが、貴方のお母様が身許の保證をつけて暇をおやりになつたものですから、おかげで仲々よくやつてゐるんでございませよ」

「ぢや、かうして、しよつちゆう寢てばかりゐるのか？」と私はまた訊いて見た。

「はい、旦那様、もう七年もかうして寢て居りますの。夏はこの小舎の申に寢て居りますが、寒くなりますと、湯殿の控間ひかえまへ移してくれますので、あちらに寢て居ります」

「誰が看病してくれる？　世話してくれる人があるのかい？」

「ええ、やつぱりこちらにも親切なお方がございましてね。私はここでも放つては置かれませぬの。それに、それほど皆さまのお世話にならないでも済むのでございませぬ。食べ物といつては碌なものを食べはいたしません、水はその水差にありますし、これには、いつも用意して、きれいな泉水ふきみづを入れて置いて貰ひます。水差へは自分で手が届きますし、まだ片方の手は利きますものですから。え、ここに小さい娘がゐましてね、孤し兒なんですけれど、時々見に来てくれます、有難いことに。たつた今しがたまでここに居りましたが……。お遭ひではございませぬでしたかしら？　ほんとに綺麗な、色の白い子で。その手が花を持つて来てくれますの。私はそれは好きなんですものね、花が。こちらには庭の花はありません、——前にはあつたのですけれど、今はもう根が絶えてしまひました。でも野の花も良いものでございませぬ。庭の花よりか、ずっと香りがよいものです。あの鈴

蘭なんか何よりもいい匂かがいたしますわ！」

「それで、可哀さうに、ルケリヤ、お前は退屈だとも、氣味わるいとも思はないのか？」

「だつて仕様がなぢやございませんか？ わたし、嘘を申すのが厭でございますから申しますが——最初はずるぶん大儀でした。ですけど、後にはだんだんと慣れて来て、ずっと辛抱強くなりました——もう何とも思ひません。他所様には、もつと悪い方もございますからね」

「それは又どういふことなんだ？」

「でも雨風を凌ぐところもない人もありますわ！ さうかと思ふと、目の見えない人や耳の聞こえない人もあるし、私はお蔭様で眼もはつきりして居りますし、何でも、何でも聞こえますものね。土龍もぐらが地面の下へ穴を掘つて入れば、——それさへ聞こえます。それに、どんな匂ひでも、たとへどんなに幽かな匂ひでもわかります！ 畑の薔薇や、お庭の菩提樹に花が咲けば——聞かなくても分かるくらいで、私が一番さきに知るのでございますよ。とにかくそちらの方から風が少しでも吹いて参りますればね。いいえ、なんで神様を恨むことがございませう？ 私よりもずつと悪い人がたくさん居りますのにね。ここなでございませうよ。達者な方はよく罪に陥ちやすいのでございますが、私はもう罪には縁がなくなりました。ついこの間、お坊さまのアレクセイ神父様が聖餐を授けようとなすつて、その節おつしやいますのには『お前さんは懺悔をするがものはない、かうしてゐては罪も犯せまいの？』つて。ですけど、わたしはお答へしました、心の中の罪はどうしたものでございませう？』つて。すると『まあ、それは大した罪ではないよ』とおつしやつて、お笑ひなさいましてね」

「ではございますが、私はそんなに心の申の罪も犯しては居りませんでせうよ」と、ルケリヤは續けた、「何故と申して、物事を考へたり、わけても昔のことを思ひ出したりしないやうにと、自分で慣らして参りましたものね。ですから月日は一そう早く経つてしまひましてね」

白状すると私は全く驚いてしまった。「ルケリヤ、おまへは始終獨りであるのに、どうし

て考へ事が頭に浮かばないやうにできるんだ？ それとも何時も眠つてゐるのか？」

「お、いいえ、且那樣！ いつも眠れるとばかりは参りません。大した痛みはないといふものの、からだ身體の心や骨が痛みましてね、それで、思ふやうに眠れないのでございます、ほんとに……。けれど、まあ、かうして此處に獨りで横になつて居ります。かうして居りまして何も考へません。ただ生きてゐて、息をついてゐることを感じますばかりで、そのことが精々なんでございますよ。見たり聞いたりは致します。蜜蜂が巢の中でぶんぶん唸つてゐたり、鳩が屋根の上にとまつてくうくういつてゐたり、雌鷄が雛をつれて麵麩屑などをつつきに出て來たり、雀が飛び込んで來たり、蝶が舞ひ込んだ——こんなことがとても私には氣持がいいのです。一昨年はその向ふの隅へ燕までが巢をかけまして、子供を孵しました。それはそれは面白うございましたよ！ 一羽が巢に飛び歸つて、すり寄つて雛に餌をやると、また飛んで行つてしまひます。それからまた見ると、他のがもう入れ代つてゐます。どうかしますと開いてる戸口の傍を通つたばかりで、飛び込まないで行つてしまふことがございます。すると子どもが直ぐにちいちい鳴いて、嘴をあけてゐます……。私は翌る年も來るのを待つてゐましたのに、聞けばこちらの獵師が鐵砲で撃つてしまつたさうでございます。あんなものを撃つたつて何になりませう？ 燕なんか大きさは甲蟲と同じ位なのですものね……。何て貴方がたは意地悪なんでございます、獵をなさる方は！」

「僕は燕なんか撃たないよ」と私は急いで言つた。

「でも一度」とルケリヤはまた始めた、「それは可笑いことございましたよ！ 兎が飛び込んで來ましてね、ほんとに！ きつと、犬にでも追はれてたのでございませう。とにかく戸口から轉げ込むやうに入つて來ましたの！……すぐ傍へうづくまつて、——ずいぶん永いこと坐つて居りました。始終、鼻を動かして、髭をびくびくさせましてね——それこそ軍人さんか何ぞのやうに！ そして私の方を見るのです。多分、私が怖いものでないといふことが分かつたのでせう。たうとう立ちあがつて、戸のところまで跳ねて行つて、敷居の上から、あたりを見越ししました、——その様子といつたらどうでせう？ それ  
は可笑しかつたのですよ」

面白くはないか……とでもいふやうにルケリヤは私の方に眼を向けた。私は相手の氣に入るやうに、ちよつと笑つた。ルケリヤは渴いた唇を咬んだ。

「それで冬になりますと、どうしても餘計に悪くなるのでございますよ、暗いものですからね、蠱齋を點すのも惨めですし、それに、つけたつて何になりませう！ 読み書きだけは知つてますし、讀むのも何時も好きですけど、何を讀みませう！ ここには本など一冊もございません。よしあつたとしましても、どうしてそれを持つてゐることができませう、本など？ 氣晴らしにといつてアレクセイ神父さんが曆こよみが持つて來て下さつたのですが、何の役にも立たないとお考へになつて、また持つて行つておしまひになりました。尤も、暗いことは暗いのですけれど、始終、何か聞こえるものがあつて、蟋蟀が鳴いたり、鼠がどこかで音を立ててゐたり。こんな工合ですから、何も考へない方が——いいのでござりますよ！」

「それから私もお祈りはいたして居りますの」  
ルケリヤは少し息をついて、話を續けた、「ただ私、餘り澤山お祈りの言葉を存じませんのですけれど、さうかといつて、神様をうんざりさせるには當りませんものね？ それに何を私にお願ひする事がございませう？ 私のお願ひすることは神様の方が私よりずつとよく御存じです。神様は私に十字架を授けて下さいました——これは私を愛して下さいるからでございます。ですから、もう私達はその事をよく悟らなければなりません。で、私は『われらが父よ』、『聖なる母よ』、『悩める者への讚歌』等を誦んで、——それからまた何も考へないで、靜かに横になつて居ります。それで何事もないのでございますよ！」  
二分間ほど経つた。私は沈黙を破らずに、腰掛にしてゐた狭い桶のうへに身動きもしなかつた。私の前に横たはつてゐる、この生きてゐる不幸な生物の酷しい石のやうな靜けさが私にも傳はつて來て、何だか私も痺れたやうになつた。

「あのね、ルケリヤ」と私はたうとう口を切つた、「お前に申し出たいことがあるんだがな實は病院へ、町のいい病院へ連れてゆくやうに言ひつけようと思ふんだが、どうだらうな？ なあに、分かるものか、恐らくまだ癒せるだらうよ。とにかく、お前を獨りで置く

わけには行かない……」

ルケリヤは微かに微かに眉を動かした。「おお、いけませんわ、旦那様」迷惑さうに低い聲でいふ、「病院へなぞ遣らないで下さいまし。そつとしいて下さいまし。そんなところへ行けば却つて苦痛な増すばかりですから。もうかうなつてはどうして癒せるものですか！……さういへば、日外はお醫者がこちらへ参りまして、私を診察したいと仰つしやいました。私はどうぞ後生ですから、このままにして置いて下さいとお願ひしました。けれどもお取り上げにならなかつて！ 私をあちこちへ向き直らせて手や足を捏ねましたり、伸ばしたりしましてね、そして仰つしやいますには、『自分は學問のために、かういふことをするんだ。自分は學問に身を捧げてゐる者だ、醫者だ！ それでお前は僕に逆らふわけには行かない。何故といふに、自分は色んな功勞があつたので、勳章も貰つてゐるのだ。そしてお前たち、愚民のために盡力してゐるんだ』つて。そして無闇にそこいらを痛くして、病氣の名を言ひました、——随分ややこしい名前でした——そして、そのまま、行つてしまつたのです。ところが、それから丸一週間といふもの、骨といふ骨が痛みましてね。貴方は『獨りである、いつも獨りである』と申しますけれど、いつもではございませんの。人が来てくれますのでね。私はおとなしくしてゐて、——別に厄介はかけません。お百姓の娘たちが遊びに来ては、冗談を言ひ合ひますし、女の巡禮が迷ひ込んで来てはイエエルサレムの話をしたり、キーエフの話や聖い町々の話をしてくれますし。それ一に私は獨りでゐてもちつとも怖くはございません。却つてその方がいい位です、ほんとに！……ですから、旦那様、どうか私にお構ひなく、病院へなんぞ連れて行つて下さいますな、……御親切はありがたいでございますけれど、ただ、どうか私にお構ひ下さいませんやうに」

「そんなら、お前の好きなやうに、好きなやうに、ルケリヤ。僕はお前のためを思つていつて見ただけなんだから……」

「よく存じて居ります、旦那様、私のためを思つて下さることは。さうですわ、旦那様、けれど誰が、他人を助けるなんてことが、できるものでございませうか？ 誰が他人の心の底まで立ち入れるものでございませうか？ 人は自分で自分の始末をして行かなきやな

りません！ まさかとお思ひになるでせうが、——私も時折は、たつた獨りで寝やすんでゐて、……何だか世の中に私獨りだけが生きてゐるやうな氣がします。たつた獨り——私だけが生きてゐるやうに！ そして、何だか勿體ないやうな氣がして來ます。……私はすっかり考へ込んでしまひます、不思議なほど！」

「一體、どんなことを考へ込むんだね、ルケリヤ？」

「それは、旦那様、どうしてもお話しできませんの、説明ができませんの。それに、後になると忘れてしまふのでございましてね。何か雲のやうなものが下りて來て、それがぱつと擴がるかと思ふと、氣が清々して、いい心持になるのでございませぬ。ところが、それは何であつたかと申されると、さつぱり分かりませんの！ ただ若し私のそばに人が居りますと、そんなものは何もなくて、自分の不都合はせといふことよりほかに、何ひとつ思はないだらうと、さういふ氣がするのでございませぬ」

ルケリヤは苦しさうに溜息を洩らした。胸も、その手足と同様に自分の思ふやうにはならなかつたのである。

「旦那様は大へん私のことを氣の毒がつて下さるやうにお見受け申しますが、そんなにお氣の毒がられるにはあたりませぬの。どうか、あんまり氣の毒がつて下さいますな、ほんとに！ 御安心をいただくために、一寸お話し致しますけど、どうかしますと今でも……。覺えていらつしやるでせうね、若い時分に、どんなに私が陽氣だつたか？ わたし、向ふ見ずの娘でしたわ！……それで、どうでしたらう？ わたし、今でも歌をうたひますのよ」

「歌を？……おまへが？」

「ええ、歌を、古い歌を。ハラウオド輪踊りのや、キウラウナ皿占ひのや十二日節のなど、何でも歌ひますの。わたし、今でもたくさん知つてゐて、忘れないんでございませぬ。ただ普通の踊りの歌は歌ひませぬ。今の身分では仕方がございませぬから」

「一體、どんな風に歌ふの、……自分ひとりのために歌ふのか？」

「ええ、さうですの、聲を立てて。大きな聲は出ませんけれど、それでも人に分かるくらゐに。あの、さつきお話ししましたでせう——娘が來るつて。あれは孤し兒で、よく分か

る子でございますよ。それで、私はあの子に歌を教へましてね、もう四つほど覚えまして。ひよつとしたら本當になさらないでせうね？ では一寸お待ち下さいまし、直ぐにお聞かせ申しますから……」

ルケリヤは息を継いだ……この半ば死にかかつてゐる生物いきものが歌を唄はうとしてゐるのだといふ考へは、思はず私のうちに恐怖を喚び起こした。しかし、私が一言もいひ出さないうちに、私の耳には、長々とのぼした、殆んど聞きとれるかとれないくらゐの、しかも清く澄んだ、しつかりした聲が響いて來た……、續いて二聲、三聲と。ルケリヤは『草場のなかで』を歌つた。彼女は化石したやうな顔のけしき一つ變へずに、眼さへ一ところに据ゑたまま歌ふのであつた。とはいへ、このあはれな、力をこめた、細い煙のやうにふるへ勝ちな聲たとへやうもなく哀切なひびきをもつてゐた。彼女はその魂の全部を注ぎ出さうとしたのである……。私はもう恐怖の念は感じなかつた。いひ知れぬ憐憫の情が私の胸に側々と迫るのであつた。

「あゝ、やつぱりいけない」と不意に言ふ、「力が続きません……、お眼にかかつた嬉しさに胸が詰まつてしまひました」

彼女は眼を瞑ぢた。

私は彼女の小さい、冷たい指のうへに自分の手を置いた……。彼女は暫くじつと私を見てゐた——が、間もなく古代の彫像に見るやうな、金色の睫毛におほはれた暗い臉は再び瞑ぢられてしまつた。それも暫くすると、その眼は薄暗い中で輝いた……眼は涙に濡らされた。

私は相變らず身じろぎさへもしなかつた。

「わたし、何ていふお馬鹿でございませうね！」とルケリヤは思ひもよらぬ力のある聲で不意に言つて、眼を大きく見開き、瞬きをして涙を散らさうとした、「お恥かしうございませう！ まあどうしたこととございませう？ こんなことつて、永らく無かつたこととございませう……。去年の春、ワーンシャ・ポリヤーコフがここへ來ました時からでございます。

あの人が一緒に腰をかけて、話をしてゐました時は——何ともございませんでしたが、行

つてしまはれると、私は獨りぼつちになつて、どんなに泣きましたらう！ どうして涙などこぼしたのでせう！……けれど、私ども女なんてものは、何でもないことに涙を流すものでございますのね」といつたが、「旦那様」とルケリヤは附け加へた、「きつと貴方はハンカチをお持ちでございます。お厭でもございませんが、ちよつと私の眼を拭いて下さいまし」

私は急いで、望み通りにしてやつた、——さうしてハンカチをそのままルケリヤにやつた。初めのうちは辞退した。……「こんなものを戴きまして、どういたしませう？」と言つた。ハンカチはかなりお粗末なものではあつたが、きれいで白くはあつた。やがて彼女は弱々しい指でつかんで、もう二度と放さうとはしなかつた。二人のゐる暗がりになつて來たので、私は女の容貌を、はつきりと見わけることができた。その顔のブロンズの下に、ほんのり見える淡い紅らみさへも認めることができた。少くとも私にはさういふ氣がしたのであるが、その顔のうちに、美はしい昔の名残さへもさぐり得たのである。

「旦那様、あなたは眠れるか？ と、お訊きになりましたね」とルケリヤはまた話し出した、「眠るのは本當にたまさかでございますが、眠ると、きつと夢を見るのでございますよ、——よい夢を！ 夢の中ではいつも私、病氣ではないんでございますよ。いつも丈夫で、それは若いんでございましてね……。たつた一つ悲しいことには、眼がさめたときに、

——樂々と伸びがしたいと思ふのに、——それどころか、まるで鎖でつながれてゐるやうなのでございます。いつかは、何て不思議な夢を見たのでせう！ 若し、およろしかつたら、お話いたしませうか？ ぢや、お聞き下さいまし。氣がつくと、私は野原の眞ん中に立つてゐました。あたりにはライ麥、それは背の高い金色に熟れたライ麥がございましてね！……私は赭い犬を連れて居りました。それが意地の悪い、それは意地の悪い犬でして、しよつちゆう私に齧みつかう、齧みつかうとするのでございます。私はそれから手に鎌を持つて居りました。それもただの鎌ではなくて、あのお月様が鎌のやうになることがございますね、あれにそつくりなのでございます。私はこのお月様で、このライ麥をそつくり刈り取らなければならないのでした。けれど私はすつかり疲れ切つて居りました。月は眼

をくらくらさせますし、それに何だか妙にだるくなりましてね。ところが私の周りには矢車菊が、それは大きい矢車菊が生えて居りましてね！それがみんな私の方へ頭を向けて居りました。私はこの矢車菊を摘んでやらうと考へました。ワーシヤが来る約束をしてゐたものですから、まづ花環を拵へようと思つたのです。麥を刈るのはそれからでも遅くはあるまい……。

私は矢車菊を摘み始めました。けれど、いくらしても、みんな指の間から何處かへ消えてしまふのです。どんなにしても花環が編めない。そのうちに誰かが傍へやつて来る。すぐ傍までやつてくる音がしまして、『ルーシヤ！ルーシヤ！』と呼ぶのでございます、……あゝ、残念だ、たうとう間に合はなかつた！と、私は考へました。でも、どつちにしたつて同じことだと思つて、私は矢車菊の代りに、お月様を頭の上に載せました。頭飾りのやうにお月様を載せたのでございますよ。すると急に身體ちゆうが光り出して、あたり一面が明かるくなりました。ふと見ると、——穂の上を傳つて足早にやつて来る、——それはワーシヤではなくて、紛れもない基督様なのでございます！どうしてそれが基督様とわかつたのか、それは言へませんの、……絵に書いてあるやうな基督様とは違ひますけれど、やつぱりあの方なのです。髯のない、背の高い、若い御方で、眞白づくめにしていらつしやいました——帯だけは金色でございましたけど。そして私の方へ手をさしのべて仰つしやいますには、『怖れなくともよい、着飾つた可愛い嫁御、儂の後について来るがよい。お前は天國の輪踊りの音頭取になつて天國の歌を歌ふがよい』 私は思はずその御手におすがり申しました！ 犬はすぐ私の足について來ます……、ところが私たちは上の方に舞ひあがり始めました！ あゝの御方がお先に立つて……。基督様のお翼は驪のやうに長いお翼で、空いつばいにひろがりました、わたしはその後について参りました！ 犬はどうしても後に残らなければならなくなつてしまひました。そこで、私はこの犬が私の病氣であつたこと、天國には、もうこの犬の居どころがないのだといふことが、やうやく分かつたのでございます」

ルケリヤは一寸の間、黙りこんだ。

「それからもつと夢を見ましたの」とまた話し出した、「それは、ひよつとすると幻だつたかもわかりませんが——それはもう、しかと分かりません。私はこの小舎の中に寝てるやうに思ひました。すると亡くなつた両親が参りましたの、お父さんとお母さんと、私にむかつて丁寧にお辭儀を致しましたが、お二人とも何とも仰つしやらないでございませぬ。ですから『お父さん、お母さん、私にお辭儀をなさるんですか?』と訊きましたの。すると『實はお前がこの世で大へんな苦しみをしてゐる、そのためにお前は自分の魂を和らげたばかりでなく、私たちの大きな重荷をも卸してくれた。だから私たちはあの世でも大へん氣樂なのだよ。お前はもう自分の罪とは縁が切れてしまつて、今では私たちの罪ほろぼしをしてゐて呉れるのだ』と申しました。そしてこれだけのことを言つてしまふと、両親はまたお辭儀をして、——ふつつりと見えなくなつて、見えるのは壁ばかりになりました。それから私は、このことがどんなことだつたのか、不思議になりました。懺悔のときにお坊様にもお話いたしました。尤も、お坊様は、それは幻ではあるまい、幻といふものは坊さんにだけ見えるものだからと仰つしやいました」

「もう一つこんな夢を見たのでございますよ」とルケリヤは話し續けた、「何でも私は往還の柳の下に腰をおろしてゐましたの。ぐるりを削つた小さな杖を持つて、頭陀袋を肩にかけて、手帕で頭をつつんで——まるで巡禮の女のやうなでございませぬ。そして私はどこか遠い遠い所へ巡禮して行かなければならぬのでした。巡禮はしよつちゆう私の側を通つてゐませぬ。誰もが疲れ切つた顔をして、みんな、お互ひによく似てゐる顔なのです。すると、その人たちの間をぐるぐる廻つてゐる一人の女の人があるのです。他の人より頭だけくらゐ背が高くて、着てゐる着物は私たちの露西亞風ではないらしく、妙に變つてゐました。顔も妙な顔で、痩せ衰へた嚴い顔でした。そして誰もがみんな傍へよけて行くのです。その人は急に振り返つて、傍目もふらずに私の方へやつて來ました。じつと立ちどまつて私を見てゐませぬ。この眼は鷹のやうで、黄色くて、大きくて、とても澄んでゐるのでございます。『どなたですか?』と訊きますと、その人は『わたしはお前の死神だよ』と申しました。私はちつとも驚くどころではなく、かへつて嬉しくて嬉しくてたまらない

ので、十字を切りました！　すると、私の死神だといふ女の人の申しますには『ルケリヤ、私はお前が可哀さうだけど——連れて行けない、——さよなら！』つて。あゝ！　私はどんなに悲しいございましたらう！……『連れてつて下さいまし、あなた、どうか連れてつて！』と申しますと、私の死神は私の方を振り向いて、話をはじめました……。わたしの死期しじきを知らせて下さるのだとは分かりましたが、はつきりしない、譯のわからない言葉でした……。『ペトローフキが濟んでから』……つて。私はこの言葉を聞いて眼が覺めたのでございます……。私はかういふ不思議な夢を見るのでございますよ！」

ルケリヤは眼を上の方へ向けて……。深い感慨に沈んだ……。

「ただ悲しいことには、一週間の間、ちつとも眠れないで暮らすとがでございます。去年ある奥方がお見えになりました、私を御覧になつて、睡眠薬ねむりぐすりを一壺下さいました。そして一度に十滴づつ飲むやうにと教へて下さいました。それが大へんよく効きまして、よく眠れたものでしたが、もうその硝子の壺は疾うに空になつてしまひました……。御存じでいらつしやいませうか、あれはどんなお薬で、どうしたら求められるものでございませう？」

訪ねて来た婦人はルケリヤに阿片をやつたものに相違ない。私はさういふ薬を一壺やることを約束したが、今更ながら彼女の辛抱づよいのに驚嘆の聲をあげない譯には行かなかつた。

「まあ、旦那様！」と彼女は言ひ返した。「あなたは どうしてそんなことを？　これが辛抱などどうしていはれませう？　あのそれ、聖シメオンね、あの方の辛抱かたづよいのは大へんなものでございました。三十年の間、柱のうへにお立ちになり通したのでございませうものね！　そのほか或る聖人の方は自分から胸のところまで土の中へ埋まつてゐると、蟻が顔を食ったのでございますね、……。それから、これは或る先生が私に聞かせて下さつたお話でございますが、或る國があつて、その國を土耳其人が侵略いたしました。それで國中の人を一人残らず苦しめたり、殺したりして住民の方ではできるだけのことをいたしました。ですが、どんなにしても敵から免れることはできませんでした。すると、その國の人の中に聖女が現はれて、大きな劔を取つて、二ブードもある甲冑をつけ、敵の土耳其人に對

つて出陣いたしました。そして敵を悉く海の向ふへ逐ひやつたと申します。ですが敵を追ひ拂つてしまふと、處女むすめは『今は私を火刑ひあぶりにして下さい、國民のために火刑になつて死ぬといふのが私の誓ひであつたのだから』と敵に對つて申しました。そこで、土耳古人は魔女を捕へて火刑にしました。この時からその國民は永久に自由になつたさうです！ これこそ本當に大手柄でございますね！ それなのに私はどうでございますう！」

私はどこをどうしてジャンヌ・ダルクの物語が、この女の耳に入ったのかと、我ながら驚いた。そして暫く黙つてゐた後で、ルケリヤにその處女むすめは年齢としはいくつであつたかと訊いて見た。

「二十八か……九……三十にはなりますまい。でも、なんで年齢など勘定なさいますの！ 私はまだお話することがございます……」

ルケリヤは不意にむせたやうな咳をして、溜息をついた。

「おまへ、あんまり話をするから」と私は言つた、「それがいけないんだらう」

「さうでございます」と、やつと聞きとれるくらゐの聲でささやいた、「もうお話をやめた方がよいのです。でも、そんなこと構ひませんわ！ 今にあなたが行つておしまひになれば、思ふ存分に黙つて居られますものね。とにかく胸がすつきりいたしました……」

私は別れを告げようとしてゐた。薬を送る約束を繰り返して、もう一度考へて見た上で何か欲しいものがあつたら言つてくれと促した。

「何も欲しくはございません。このままで澤山でございます、お蔭様で」と極めて大儀さうに、しかも感動したらしく言ふ、「どうか皆様お達者で！ ですが、且那樣、お母様に一言こと申し上げて下さいまし、この邊の百姓は貧乏でございますから、——若し、幾分でもお年貢を減らしていただけたら？ 百姓たちは土地も足りませんし、利もございませんから……さうして戴けたら、あなた様をどんなにか有難がることでございますう……。ですけど、何も私は欲しいものではありません、私はこのままで何もかも澤山でございます」

私はルケリヤの願ひを叶へてやらうと誓つて、既に戸口まで歩み寄つてゐた、……すると彼女はまた私を呼び戻した。

「覚えていらつしやいませう、旦那様」と彼女はいつた。その眼のうち、唇の上には何か奇蹟的なものが閃いた、「私がどんなお下髪さげをしてみましたか？ 覚えていらつしやいませうね、膝まで届くやうな！ 私は永いこと思ひ切れませんでした……、あんな髪を……けれど、どうして梳いたりなんぞできませう？ こんな境遇で……ですから私は切つてしまったのでございます、……さう……それでは、さよなら、旦那様！ もうお話ができません……」

その日、獵に出かける前に、私は農園の監督とルケリヤの話をした。私は監督からルケリヤが村では『生神様いきがみさま』といはれてゐること、あんな風であながら少しも村の人に厄介をかけること、また愚痴や不平を聞いたことがないことなどを話された。「自分では何をしてくれとは申しません。それでゐて、何をしても有難がるのです。まあ、素直な人、本當に素直な人といはなければなりません。神様から」かういつて監督は言葉を結んだ。「罪があつた爲に打ちのめされたのだと思ふ人もありませんが、私どもはさうは思ひません。まあ、かりに、罪があるかないかを決めるとしたら——いや、私どもはそんな詮議は致しません。そつとして置くことです！」

\* \* \* \* \*

數週間の後に、私はルケリヤが亡くなつたといふことを聞いた。つまり死神が後から、……しかも『ペトロローフキが濟んでから』やつて來たのである。人の話によると、臨終の日、ルケリヤは絶えず鐘の音を聴いてゐたといふ、——アレクセーエフカから教會までは五露里りの餘もある上に、その日は日曜日でも祭日もなかつたのに。それにしても、ルケリヤはその音が教會からではなく、『上から』聞こえて來ると言つたさうだ、——おそらく、彼女は敢へて『天から』とは言はなかつたのであらう。

■ 訳者中山省三郎氏による「註」（注記ページ表記を外し、私のテキスト注記に準じた表示法をとつた）

・生神様…直譯的にいへば、「生ける不朽體」である、すなわち、純潔なる生涯を送つて神の御意にしたがへる者の肉體は死して後も永劫に朽ちないとされてゐるが、この一篇の主人公もまた現にかやうな生涯を送つてゐるところからかういふ綽名をつけられてゐるのである。ここに「生神様」と譯したのは、綽名の生硬さを避けたためである。

・キーエフ…キーエフは昔の都で、ここには大きな寺がたくさんある。ここは「聖い町の母」と呼ばれてゐた。

・皿占ひ…皿の下に物を置いて、占ひをするとき、皿をとりまいて女たちが歌をうたふ。

・十二日節…クリスマスから耶蘇洗禮祭（一月六日）まで。

・ペトローフキ…聖。ペトロ祭（六月二十九日）前の精進期。

・先生…村人に読み書きを教へる人。

・ニブード…およそ九貫目。

・ジャンヌ・ダルク…敵は英國人（アングリチャーニ）であつた。ルケリヤが話すのは、トルコ人（アガリチャーニ）である。音の類似によつて、誤り傳へられたのであらう。